様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　22 年　３月　31 日現在

研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2007～2008
課題番号：１９５３０８４５
研究課題名（和文）大正、昭和前期における国語教科書と教養形成に関する研究

研究課題名（英文）A study about the national language textbooks and the culture formation in the era of Taisho and earlier period of Showa

研究代表者
武藤　清吾（MUTOU　SEIGO）
広島経済大学・経済学部・准教授
研究者番号：３０４４１５０４

研究成果の概要（和文）：旧制中等学校生向けの芥川龍之介編『近代日本文芸読本』、菊池寛編『新文芸読本』、垣内松三編『国文選』、岩波編集部編『国語』、鈴木三重吉主宰『赤い鳥』を対象に、教材選定、編集によって示された教養のすがたを明らかにした。特にそれらの編集者の文芸観、教育観に注目して、文芸、国語読本の学び手となった中学生たちの教養形成に与えた影響を見た。また、これらの読本が相互に影響しあいながら編集され、さらに新しい教養を生み出していった事実も明らかにした。

研究成果の概要（英文）：I clarified an essence of culture described Ryunosuke Akutagawa ed. "Kindainihonbungeitokuhon", Kan Kikuchi ed. "Shinbungeitokuhon", Matsuzou Kaito ed. "Kokubunsen", Iwanami editorial department ed. "Kokugo", Miekichi Suzuki sponsorshiped "Akaitori" for old system secondary school students by thinking how they had selected the teaching materials and edited those. Particular I have considered of paid attention those editor’s viewer to literary arts and on education and highlighted in the influence and the culture formation to the junior high school students that had learned some literary arts and Kokugotokuhons. In addition, I clarified the fact that those were edited and had brought about newer culture while these Tokuhons influenced it mutually.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	1,200,000	360.000	1,560,000
２００８年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・教科教育学
キーワード：旧制中等教育、文芸・国語読本、教養、芥川龍之介、菊池寛、赤い鳥、西尾実、垣内松三

１．研究開始当初の背景

日本型教養形成と「国語」教育の関係は、これまで十分研究対象となってこなかった。日本型教養研究が社会学や思想史学分野で行われる一方で、「国語」教育は教育学で研究されてきたという分野の壁があったからである。内容的にも、「国語」教育分野では文学作品や評論は教材論として扱われる傾向にあるため、その成立には触れても思想史、文学史にまで位置づけることは難しかった。

本研究では、この壁を乗り越えるために、媒介に芥川龍之介編『近代日本文芸読本』をおき、その比較対象という形で、社会学や思想史学、あるいは文学史、教育史の分野と「国語」教育の分野で共有できる教養教育の課題を探る研究方法をとることにした。『近代日本文芸読本』は、文学、哲学、思想分野の多彩な作品を収録した教養の宝庫である。この読本と当時の「国語」読本を比較することで、哲学、思想、「国語」、文学分野の架橋が可能となる。その基礎作業として大正期から昭和前期にかけて流通した「国語」教科書、「国語」読本の全体を一覧化し「国語」読本、文学読本の内容を分析するというものである。この研究は、先行研究を持たない研究として独創性を有していると考えている。

「国語」教科書は、「読本」という名称が示すように、文学作品を「読む」という「国語」教育の素材になってきた。「国語」教育が「読む」教育を中心に行われた史的背景はここにあり、のちに教養を担った人々も青年期にここから巣立ったことで、読んで得た知識を中心に教養形成したことになる。「読む」ことが中心になれば、演劇や口演、弁論、映画を教育するというような、知識の獲得以外の教育活動は疎かになる。こうした歴史的事情が、教養という概念が本来的に含有していた自由や想像力の土壌を剥落させ、知識偏重の日本型教養概念を形成したのである。戦後も高度経済成長を背景に実用知識の獲得が重視され、教養概念はさらに歪んだ。本研究によって、「国語」教育と青年期教養形成が孕んだ問題を歴史的に考察する最初の時期の基礎資料を具体的に提示できると考えた。

２．研究の目的

本研究は、1920 年代から 30 年代にかけて刊行された旧制中学校文芸読本、「国語」読本に示された教養観を分析して、日本型教養形成の基盤が 20 世紀前半の「国語」教育やその周辺の文化構造でどのように実践的に生成されてきたかについて考察することを目的としている。

そのため、文芸創作の集大成として編集された『近代日本文芸読本』や菊池寛編『新文芸読本』などによる編集とその批評を文芸実践と定義した。具体的には、生み出されてきた文学作品を鑑賞、評価して、編集と普及という、さらなる文芸実践によって享受していこうとする実践をさしている。文芸読本、「国語」読本を編集することで、どういう日本型教養がめざされたかを考察することが本研究の第一の課題である。

「国語」読本が現代文重視に移行した背景には 1920 年代前後の児童文学の隆盛があった。童話童謡誌『赤い鳥』はその典型的な事例である。読者のなかには 13 歳から 16 歳ぐらいの青少年も多かった。『赤い鳥』は、年代、性別を越えた文芸実践と創作実践の共同の場となっており、彼らの投稿作品をみていくことで、『赤い鳥』を舞台にした実践でめざされた日本型教養の特質を考察するのが本研究の第二の課題である。

文学の隆盛や文芸読本、「国語」読本の充実、読者層の形成は、「国語」教育方法の開拓にも影響を与えた。その画期となったのが垣内松三編の「国語」読本と岩波編集部編教科書『国語』である。そこで形成された、あるいはめざされた日本型教養の特質を探るのが本研究の第三の課題である。

これらの読本に示された教養の特質を考察することで、文芸読本、「国語」読本による教育実践、文芸実践に 21 世紀の実践の可能性を示唆する萌芽を探りたいというのが本研究の主題である。

３．研究の方法

(1) 本研究の考察対象は、『近代日本文芸読本』、『新文芸読本』、『国文選』、『国語』、『赤い鳥』とその実践である。これらの実践を総称して教養実践と呼ぶ。文芸・「国語」読本の文芸実践、『赤い鳥』の実践、「国語」教育実践というそれぞれの実践は、実践知としての教養を提示している。それらは相互に影響しあいながら、その他の実践に示された教養も吸収して新たな実践を展開した。

そのために、それぞれの実践に固有な主題と共通する主題を交差させながら考察した。たとえば、固有の主題としては、芥川龍之介が編集したことによって読本が持つことになったカノンとしての役割、共同して実践した芥川龍之介と菊池寛の文芸実践、垣内松三の「国語」教育理論の基底にある鑑賞論や解釈論が読本編集に与えた影響、古典に学び「国語」教育理論を構築した西尾実の編集した『国語』の特徴、『赤い鳥』を舞台に展開

された読者との共同実践の考察があげられる。また、読本や雑誌を編集刊行することで見えてくる編集者や実践家の教養観の分析を共通する主題とした。その基礎作業として、1910 年代から 30 年代にかけて流通した「国語」読本の全体像を一覧化し、「国語」読本、文芸読本の内容を比較分析した。

(2)研究の概要と意義

①『近代日本文芸読本』に収められた作品の特徴を分析して、龍之介が読本編集をとおして実践した文芸実践の特質を考察した。

②龍之介とともに活躍した菊池寛の文芸実践を考察した。『新文芸読本』と『近代日本文芸読本』とを比較して、寛の文芸的教育の意義を明らかにした。また、『赤い鳥』を舞台に展開された中等学校生らの教養実践の特質を明らかにして、その意義を考察した。

③垣内松三の「創造的読方」論の意義と問題点を明らかにした。また、『国文学大系　現代文学』と『国文選』が菊池寛の文芸論にも学び、『近代日本文芸読本』にも影響を与えたことを明らかにした。

④西尾実の『国語国文の教育』に見る教養論と教材論を考察した。また、『国語』の特色を明らかにして、そこに収録された作品とその教養観を考察した。

４．研究成果

(1)『近代日本文芸読本』と文芸実践

①『近代日本文芸読本』というカノン

『近代日本文芸読本』は、1925 年 11 月に発行された。書肆側は「国語」副読本を構想して龍之介に編集を依頼した。龍之介は、「検定を受ける為には有島武郎、武者小路実篤両氏の作品を除かなければならぬ」（「縁起」）けれども、女性記者と心中した武郎、社会主義実践をしていた実篤の作品が検定上問題になることを承知のうえで、あえて二人の作品を収めて文部省の検定を拒んだ。ところが『近代日本文芸読本』は発売当初から不幸な出来事に見舞われた。転載許可などの手続き問題に端を発し、印税で書斎を建てたという風評まで立った龍之介に疑惑を抱く作家も出てきたのである。この背景には、龍之介が文壇の長老をはじめとする作家の作品を読本に選定するという行為への批判があった。同時代の結社や同人誌、商業雑誌、新聞などから文芸作品が採られ、彼の文芸論、鑑賞論によって評価された作品が、当代の文芸叢書に比肩して劣らぬかたちで収録されている。有力な作家が認定する作品群はカノンとしての意味を持ち始め、それが流通することで、その時代を束ねる規範になる。表面的には無断収録への批判であったが、実はカノン化への抵抗であったと考えられる。

②第一集の特徴

第一集の対象は中学校 1 年生であり、入門的な配慮がある。家族を主題とした二葉亭四迷「平凡」、野上弥生子「飼犬」、石川啄木の短歌などが印象深い。国木田独歩「非凡なる凡人」は定番教材である。詩では、島崎藤村、土井晩翠、短歌、俳句では、尾上柴舟、高浜虚子の作品を収めている。佐藤春夫「最もよき夕」、武者小路実篤「仏陀と孫悟空」は宗教や仏教に材を得たものである。鷗外、小山内薫、堀口大学の翻訳は、緑雨の「新体詩見本」とともに近代文体が西洋の作品を翻訳する過程で形成されたことを学ぶ例文である。

③第二集の特徴

第一集に続き家族を描いた作品が多く、有島武郎「小さき者へ」、森田草平「輪廻」が印象的である。菊池寛「出世」が労働のすがたを描き、生田長江「現代の欧羅巴と日本と我々と」、小山内薫「ベテスダの池」も近代の意味を問いかけている。ガルシン「四日間」、長田秀雄「塹壕の内」は戦場を描き、倉田百三「布施太子の入山」は人生の意味を問いかける。文体では、写生と叙景、紀行と日記という視点から作品が並べられている。短歌では、与謝野晶子、俳句では、高浜虚子、詩では、室生犀星が収められている。

④第三集の特徴

1920 年代の文芸雑誌、同人誌の活発な活動を反映して自然主義と反自然主義が併置され、拠点誌で活動した作家から多くの作品が採られている。反自然主義では、永井荷風「日本の庭」、谷崎潤一郎「兄弟」、菊池寛「屋上の狂人」、自然主義では、中村星湖「林野巡査の一日」、若山牧水の短歌が収められている。トルストイ訪問紀行である徳冨健次郎「初対面」、武者小路実篤「人類愛について」、北村透谷「精神の自由」は国際的な議論を学ばせる配慮がある。永井荷風「日本の庭」、上田敏「幽趣微韻」は、日本と西洋の美意識が対比され、翻訳では、ヴィクトル・ユーゴー「ルヰ・フィリップ王の出奔」がある。短歌では、北原白秋、若山牧水、俳句では、荻原井泉水、詩では、萩原朔太郎、西条八十が収められている。

⑤第四集の特徴

第四集は中学 4 年生という精神年齢が考慮されている。家族を描いたものでは、泉鏡花「国貞ゑかく」、山本有三「海彦山彦」、森鷗外「高瀬舟」、歴史的題材では、長与善郎「項羽と劉邦」、内田魯庵「切支丹迫害」がある。坪内逍遥「桐一葉」は、島村抱月「現代喜劇の経過」とともに現代でも日本と西洋の演劇を学ぶ教材としてよいものである。思想的な分野では、和辻哲郎「日本は何を誇るか」、内田魯庵「切支丹迫害」があり、西洋との対比では、永井荷風「泰西人の見たる葛飾北斎」も収録されている。短歌では、長塚節、前田夕暮、俳句では、河東碧梧桐、大須賀乙字、詩では、上田敏「落葉」、北原白秋「公園の

薄暮」、高村光太郎「雨にうたるるカテドラル」が収められている。
⑥第五集の特徴
　第五集は、青年期の高い教養と幅広い学識を得させようという配慮が随所に見られる。志賀直哉「城崎にて」は多くの教科書で採用されてきた。教養では、漱石「スヰフトと厭世文学」、小宮豊隆「能楽に就いて」、阿部次郎「思想と実行」が収められ、社会的関心を呼ぶものとして、水上滝太郎「昼」、斎藤緑雨「金剛杵」、木下杢太郎「絵踏」が印象深い。短歌では、島木赤彦、斎藤茂吉、与謝野寛に加えて、正岡子規「歌よみに与ふる書」、俳句では、松根東洋城、内藤鳴雪の俳句、詩では、三木露風、薄田泣菫が収められている。
⑦『近代日本文芸読本』の教養実践
　龍之介が関心を示したのは、叙景や紀行を中心とした詩、短歌、俳句、幻想小説、他者としての異文化、翻訳文体による作品創作、自由、平等思想を掘りさげた小説や評論、家族を舞台に他者との関係をさまざまに描いた小説である。なかでも、日本人の自然観を表象した叙景や紀行文体の学びが期待されている。そのことをよく示しているのが、読本に多くの詩、短歌、俳句を採用している点である。31 名の作家による詩、短歌、俳句が紹介され、文学史の理解も深まるように編集されている。このほか、西洋と日本の戯曲、幻想や怪異を描いた作品が多く収録されている。翻訳文体と異文化に関わる作品も多く、これらの翻訳文体と対比するかたちで、言文一致、新体詩、写生文、小品、写生文的小説、根岸派文体、日記を紹介している。二つの文体比較から、実践的な学びが期待されている。だが、叙景、紀行、異文化、翻訳、文体形成の実践的な学びは、これまでの「国語」教育では十分に実践されていない。
(2)文芸読本と文芸実践
①文芸実践家　菊池寛と芥川龍之介
　菊池寛は、1923 年 1 月に『文藝春秋』を創刊した。「生活第一、芸術第二」の信条によって刊行され、作家と読者の結びつきを強めるひとつの運動体であった。その戦略は、『文藝春秋』を舞台に読物を提供することに始まり、そのほかのさまざまな仕掛けで大衆的に広く文芸への関心を高めて読者との交流も盛んにして文芸愛好者を育て、『文芸講座』や『文芸講演会』などで文芸をより本格的に理解できる文芸的教養を持った読者を獲得していくというものであった。
②菊池寛編『新文芸読本』の文芸実践
　菊池寛編『新文芸読本』は 1925 年 12 月に発行された。『新文芸読本』には、『近代日本文芸読本』に収められた作品も多く、作家も 41 名中 26 名が重複している。寛が編集にあたり『近代日本文芸読本』を意識したのは、龍之介を支援して、以前と同じように文芸実践に取り組むことであった。寛と龍之介は、途切れることなく同志として文芸を創作し鑑賞し、優れた作品を他者に薦め、また自ら創作していく活動を続けた。彼らの実践から見えるのは、編集という作業の持つ意味である。編集は、目の前のものだけでなく、どこかにあるものも含め、作品を見出し、ある基準で選び出し評価し並べる作業であり、読み手を想定し、どんな読みが行われるか想像していく作業でもある。さらに、その作業を踏まえ、他者に読者が期待する新たな作品創作を促し、加えて、読み手同士が作品を媒介に交流することでもある。彼らの実践は、文芸を学ぶことが、教室で文芸作品を音読、黙読したうえで、教授者が示す解釈を聞くという受動的なものではないことを教えている。
③『赤い鳥』実践の教養観
　鈴木三重吉によって創刊された『赤い鳥』の部数は 3 万部程度であったが、その影響は部数だけでは測り知れないものがある。作家から読者へ一方通行に作品を届けるメディアではなく、年代、性別を越えた文芸実践と創作実践の共同の場となっていった。綴方、自由詩、自由画に投稿してきた中等学校生らは、題材や向きあう対象も多様であったが、自由な場で、自由と実践に裏づけられた他者と実践的に共同する思想を育てていった。
(3)垣内松三の「国語」読本
①垣内松三「創造的読方」論と「国語」読本
　垣内松三は、『国語の力』によってセンテンス・メソッドという鑑賞批評理論、形象理論を提唱した。なかでも「創造的読方」論は垣内の「国語」読本の理論的な基礎となっている。また、旧制高等学校生向け『国文学体系　現代文学』は彼の教科書観をよく示している。彼は、モウルトンなどの文芸論、菊池寛の文芸実践に学び、教科書も体系的編集へと改革していった。「創造的読方」論は、読方と綴方という二分法を超えて「創造的読方」という実践論として提唱されている。しかし、垣内は、読みの方法として「読方・解釈・批評」と定式化することで、読みの帰結を自己の内面に焦点化した議論を展開した。そのことで、読み手が他者からの働きかけを受けて、あるいは他者への働きかけを通じてテクストをさまざまに読む方法を開拓していく可能性を閉じてしまった。「国語」読本で示した教養実践の可能性をみずから閉じることとなったのである。
②垣内松三編『国文選』の特色
　垣内の編集した『国文選』は、小説、紀行、評論を主とした読本である。巻五までには小説や童話、随筆や小品、紀行、評伝が集中しており、巻六以降は評論が多数掲載されている。小説は厳選されており、漱石、鷗外、龍之介らが多い。戯曲も坪内逍遥、岡本綺堂、寛、詩も島崎藤村、土井晩翠、上田敏の作品

である。しかし、『国文選』は作品を読むことのみを主目的とした教科書ではなくなっていた。文章末の多数の添え文、手引きとしての「着眼点」、語釈、語彙、国文学形態史図表、年表がある。つまり、作品を読み、語彙や文章の学びを深め、さらに自主的な学びへと進む学習者像が描かれているのである。文芸研究、文章研究の深まりを受けて「国語」教科書が「雑纂」的な編集から「創作」的編集になってきた。その背景には、「国語」教科書に盛り込む教材が単なる文章から文化的な価値を持った教養的な文章であるという理解が進んだことをあげることができる。ここには、文芸実践の分野での、龍之介や寛の営為に学ぶ「国語」教育実践の姿がある。

(4)岩波編集部編『国語』の教養実践

①西尾実の教養論と教材論

西尾は行的認識という実践的認識論を構築して、『国語』を編集する。『国語』は、「読む」ための読本から脱して、言語を学ぶための教科書として中等「国語」教育史上初めて「読本」という名称を使用せずに『国語』と表記した。行的認識は「すべてを実践的に体得させ、全人的に把握させようとする」ものであり、この原理を自覚して教材の選定や教育にあたることを求めていた。それは、作者と読者、制作と鑑賞という二側面からの考察に支えられた認識でなければならないという二方面の実践的な見地から説かれている。ここに西尾の教養論の独自性がある。しかし、行的認識やそれによる教養論は自己の内面の深化を追い求める議論であった。自己の内面への凝視だけに拘泥しているうちにみずからの立脚点が見失われ、その間隙に「国家」や「民族」という他者からの優位や隔絶の議論を誘発しやすい論理が入り込むと共同する他者が消えていく。実践論としての意義を有した行的認識、教養論も、他者の存在を見失うとき、その意義をも失うことになる。

②『国語』の特色

『国語』では、第1学年から3学年までは、行的認識に培う「国語」教育の具体化としての学びが求められている。第4学年は、日本文化の中心としての学芸と道を古今東西の文化論で編集している。第5学年は、全体としては国文学の史的展開であるが、巻九の冒頭が小泉八雲の読書論で始まり巻十の最後が西尾本人の「生涯稽古」で終わっていることを考えると、制作（創作）と読書の実践論であることが見えてくる。つまり、『国語』の意義はその中心に実践的認識論を据えたことである。収録された小説もわずか 21 篇であり、この収録数が『国語』の特徴をよく表している。『国語』は「国語」教育実践家や研究者、子どもやその保護者に、さらには当時の文芸実践家や評論家にも、「国語」教育実践の具体的諸相を読みやすい丁寧な編集で提示した。それは同時に「国語」教育によって形成される教養のすがたを具体的に示したということでもあった。収められた教材群の学びをすすめていくことで、一人ひとりの学習者が形成していく教養のすがたが具体的に見えるようになったのである。

③松尾芭蕉の教養実践に学ぶ実践的認識論の意義と課題

『国語』には芭蕉に関する8編の文章を収め、38句の芭蕉自身の俳句、去来、惟然、曽良の7句の俳句を加えて、芭蕉の行った紀行、俳諧、叙景の実践の具体相を示している。西尾の芭蕉への関心は実践への共感からである。芭蕉の実践が他者との共同行為であり、その共同性ゆえに魅力的な形象となっていることに注目して、『国語』の学び手にそのことを学ばせようとしている。芭蕉から学んだ教養実践の豊かさについての西尾の見識が 20 世紀前半の「国語」教育の到達点を作っていったのである。しかし、西尾は、他者との共同性の意義にまで自覚的になれなかった。そのため、実践的認識論として確立されたはずの行的認識論は、人格陶冶論として自己の認識の深化へと向かうこととなった。このことが、彼の実践論を狭める要因となっており、芭蕉が展開した教養実践の核心である他者との共同性という実践論にまで理論化できないという弱点を残すこととなった。

④教養実践としての紀行と叙景

『国語』には多数の紀行文と叙景文が収められる一方で、小泉八雲、島崎藤村、五十嵐力らの読書や制作に関する評論や随筆も採用された。それは、西尾が紀行文や叙景文に共通する実践的意義を学び、深い思索と着実な言語実践に歩み始める学び手を育てたいと考えたからである。教科書の例文を指導者の指示で模倣する学びではない実践が願われており、経験の浅い中学生が、言葉の学びの出発に際して紀行文と叙景文を鑑賞して実践を体験することを重視したのである。西尾のこうした立場は、20 世紀後半の言語生活論、言語文化実践の思想へと発展して体系化されていく。ここに、『国語』に見る教養実践としての紀行と叙景の意義があった。

(5)研究の総括と展望

20 世紀前半の「国語」教育からは文芸教育の印象を抱きやすい。しかし、実際には実践当初から決定的な分岐が生じていた。自己の涵養をめざす道か、自己と異なるものを畏敬する道かという違いである。相互の影響関係は強く、互いに親和性があったが、教材収録だけでも大きな相違があったのである。その本質的な違いは、実践過程でさまざまな他者と出会うことにより自己と他者とが言葉でつながることの意味を学ぶことに主眼が置かれたかどうかである。多くの作品が発掘され読本に収録された。それが青少年に提供さ

れ教養を形成する役割を果たしていった。しかし、なかには 20 世紀後半からの「国語」教科書には登場してこなかった、あるいはほとんど収められなかったけれども、中等教育での学びに十分耐えられる作品も少なくない。今後は、特に、批判者の系譜、キリスト教、翻訳、戯曲、異文化、怪異や感覚を扱った作品の再評価をして他者との共同に根ざす学びのあり方を考えたい。

中等「国語」教育の弱点の一つは、自己の涵養または覚醒という課題意識に拘泥したことである。歴史の経験は、他者との自由な共同という実践視点から遠ざかるにつれて、教養という概念が本来的に含有していた自由や想像力の土壌を剥落させ、知識偏重の日本型教養概念を形成する志向性を持つにいたることを教えている。自己の涵養に拘泥することは、自己を他者から特権化させることである。それが他者との自由な共同を剥奪していく。それを避けるためには、先達の教養を「換骨奪胎」してしまうような教養の学びが求められている。『近代日本文芸読本』のように、具体的な古典を他者として、古典を歴史の文脈におき、それぞれを相対化したうえで、それらを教材に共同の学びを求めていくことが必要である。この点では、異文化の学びも強調される必要がある。特に、これからの「国語」教育には翻訳の実践が期待される。19 世紀翻訳の社会現象、学問動向としての意義、現代語としての日本語の成立、西欧文化受容の諸相という歴史的な学びが必要である。伝統文化を学ぶこともそれが強調されるだけでは自己涵養論の世界に立ち戻るだけである。日本型教養の本質は、他者との共同をすすめる実践知である。また、その教養は自由な実践の場で生成されるものである。伝統文化の学びも含めて、21 世紀の「国語」教育では、言語を実践的に学ぶことがとりわけ重要になる。それは、人とつながり、他者と共同してことばを作っていく学びをすすめていくことである。教養という実践知を体得することが必要になっているからである。国際化社会のもとでの共通理解は、言語文化という個々の形式ではなく、人類の共有財産としての実践知でつながることが可能になったからである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）

① 武藤清吾、菊池寛編『新文芸読本』の文芸実践、『解釈』第 55 巻第 5･6 号、査読有、2009、pp.18 - 26
② 武藤清吾、垣内松三編『国文選』の特色、『広島経済大学研究論集』第 31 巻第 4 号、査読無、2009、pp.1 - 26、http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/handle/harp/3952
③ 武藤清吾、旧制中等学校生らによる『赤い鳥』実践の教養観、『教育目標・評価学会紀要』第 18 号、査読有、2008、pp.67 - 78
④ 武藤清吾、旧制中学校国語漢文科教科書『国語』の特色（二）、『広島経済大学研究論集』第 31 巻第 2 号、査読無、2008、pp.1 - 26、http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/handle/harp/1505
⑤ 武藤清吾、旧制中学校国語漢文科教科書『国語』の特色（一）、『広島経済大学研究論集』第 31 巻第 1 号、査読無、2008、pp.1 - 25、http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/handle/harp/1495
⑥ 武藤清吾、西尾実の教養論と教材論、『広島経済大学四十周年記念論文集』、査読無、2007、pp.1099 - 1122、http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/handle/harp/478

〔学会発表〕（計４件）

① 武藤清吾、垣内松三編『国文選』の特色、教育目標・評価学会第 19 回大会、2008 年 11 月 29 日、東京学芸大学
② 武藤清吾、菊池寛編『新文芸読本』の文芸実践、第 115 回全国大学国語教育学会研究大会福岡大会、2008 年 11 月 23 日、北九州国際会議場
③ 武藤清吾、「国語」科を拒む芥川龍之介編『近代日本文芸読本』の教養実践、日本教育学会第 67 回大会、2008 年 8 月 29 日、佛教大学
④ 武藤清吾、『赤い鳥』に投稿する中等学校生たち、教育目標・評価学会第 18 回大会、2007 年 12 月 1 日、大阪経済大学

〔図書〕（計１件）

① 武藤清吾、文芸・「国語」読本に見る教養実践に関する研究、早稲田大学、2010

６．研究組織

(1)研究代表者

武藤清吾（MUTOU　SEIGO）
広島経済大学・経済学部・准教授
研究者番号：３０４４１５０４

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし